

宇宙歴0083、十一月三日。

その日、ケリイ・レズナーはたまたまフォン・ブラウンの最上層部に上がって来ていた。『上がって』来ていた……というのは、普段フォン・ブラウンの最下層にある工場地帯に住んでいて、滅多の上には上がって来ないからだ。最下層の工場地帯、と言ってもその昔そこは宇宙港だった。この街が、クレーターの中に少しづつ作られはじめたその当初は。……ともかくその日ケリイ・レズナーは最上層部の繁華街をたまたま歩いていて、ケンカを目にした。……いや。

「……月だからって、連邦にしつぽを振ってる連中はかりじゃねえんだよ!」

ケンカ、というよりは、リンチか。走り抜けるモノレールの音がうるさい高架下の小さな空き地で、数人の男が一人の男を囲んでボコボコに殴りつけている。……もつとも、自分には全く関係ない。会話からすると、殴られているのは連邦の軍人らしかった……が、それにすら興味が湧かない。

「……………」

ケリイ・レズナーはそれを横目に見ながら、脇を通り過ぎた……目的のちよっとした買い物をして、来た道を戻りかける。数歩もいかないと、先ほどリンチを

してたらしい数人の男達とすれ違った。笑いながら、そいつらは夜の街に消えていく。

……どうしても気になって、先程の空き地の脇で足が止まった。……金網の破れているところをくぐり抜けて、その先に抜けると、そこには一人の男がみつともなく伸びている。

「……おい」

声をかけてみるが、聞こえないらしい。思った通りに連邦軍の軍人の様だった。制服を着ている。それも襟章を見る限り、士官だ。

「……っ、かえ……」

男は、ケリイが近づいて来た事が分かっているのやら、分かっているのやら、仰向けに伸びたまま、何故か脇を見て手を延ばそうとしていた。しかし、相当にブチのめされているようで上手く行かない。

「……せ……」

何かを呟いていた言葉が急に途切れた。最後に一瞬、自分を見たような気もする。ともかく、いい加減その男に近づいてから、ケリイ・レズナーはやっと男が何を拾いたがっていたのか気付いた。

……連邦軍のMSパイロット章だ。

「……………」

小さく舌打ちしてから、その徽章（きししょう）を拾い、近くでその男をしみじみと見て、ケリイ・レズナーは初めてある事に気付いた。思わず、忘れかけていた名前が咽について自然に出る。……いや。これは本名じゃ無かったな、確か？

「……『テディ』……………」

そいつは実際、ケリイ・レズナーが昔知っていた『テディ』という人物によく似ていた。……姿形がそう似ているわけではない。もちろん、年も。確か『テディ』は十六才だったはずだ。髪の色も、テディは漆黒では無かった。声も。顔だちも。良く見ればなにもかも違う。だがしかし、それでもどこか似ているような気がした。

……何というか、印象が。

「……………」

少し考え込んでから、ケリイ・レズナーはその男に片

方の腕を回すと（というか、ケリイには腕は片方しか無かったのだ）背中にそいつを担ぎ上げた。

自分の家への家路を急ぐ。……こいつは自分にとつて、目の前に現れた『どうしようもない軍人』の、確かに『ふたりめ』だ。……拾って帰ろう。

「自分は……コウ・ウラキと言います」

次の日の朝、目が覚めたその男はそんな事をいったが、名前などどうでもいいことだった……目が覚めたんならさっさと帰れ。それがケリイの望みの全てだった。それでもケリイは一応聞いてみた。

「……貴様、脱走兵か？」

「え？」

すると目の前の男は妙な反応をした……ああ、知っている。ケリイは思った。そうだ。このテンポだ。このテンポで……、

「いえあの、僕は……自分の乗っていた、モビルスーツを壊してしまつて、それで……」

この返事だ。イキナリぶん殴つてやつても良かったが、とりあえず我慢した。腹が立ってしかたねえ。

「……やめちまえ！」

男……ウラキとか言ったが、そいつはきよとした顔で、相変わらずケリイを見ている。

「やめちまえ、モビルスーツの一機や二機を壊されて、それで家出だと？……なんだ、貴様は子供か！」

思い出す限り、記憶の中にあるテディは『子供』であった。……十六歳の。しかし、それと似たようなテンポで、似たように間抜けな返事を、もつと年かさに見えるこの男に言われるのがより一層腹が立つ！ケリイは思った。大体こいつ年は幾つだ。職業軍人なんだろうから、学徒動員だったはずのテディよりは年上のはずだ。……そうか、東洋系なのか。東洋系の年なんか分かりやしねエ。すると、その男が口答えしてきた。

「……でもっ、それは特別な機体で……！」

「機体に特別もクソもねえ！」

たった今現在の、有事でもなんでも無い時の、実に資源力を抱負に持つその連邦軍らしい発言にケリイはキレた。

「撃たれれば壊れる。……撃たれれば死ぬ！どんな機体でも、どんな人間でも同じだ！」

……さすがにその言葉の意味は、ウラキにも分かったらしい。ガトーの居場所を教えてやらなかった時のテディ

イと全く同じ素振りで、しょんぼりと頭を下げた。……ああ、全く！ケリイは頭を掻きむしりたくなった、俺は今度は言っちゃっただろう、本当のことを伝えただろう、なのに何故三年前と同じように俺の方が後悔したくなるような反応を返す！……やつぱり、こんなモン拾うんじや無かった。なんでこんなやつばかりが、出来損ないの軍人になって、自分の前に現れるかな！この手の人間は皆同じだ、分かっていることは美德ではない、だが本人には悪意もないのだ。……早く出て行かないか！そう思った。

「……あれ、」

と、その時頭の中で二人目の馬鹿について悩んでいたケリイの耳に、そんなウラキの音が響く。

「……すごい、何でこんなものが……！」

見ると、ウラキはケリイが考え事をしている隙に、会話を交わしていた工場の奥にあった修理途中のモビルアーマーに気付いたらしく、それに走り寄っていた。

「貴様！」

さすがにケリイは叫んだ。そして慌てて追い掛けると、ウラキを突き飛ばす。

「小僧、これに近付くな……これは飛べないポンコツだ！廃棄された役立たずで、俺が趣味でいじっている！」

……それだけのモノだ、二度と近付くな！」

突き飛ばされたウラキは、相変わらず意味の分からないと言った風情のぼかん、とした顔をしていた……しかし、そのテディと良く面影の似た男の中に、テディには無かった何か、を感じてケリイは戸惑った。……もつと見たい、と顔が言っている。……ああ、この男は機械が好きなのか。モビルスーツが、機動兵器が、単純に。

例えば、俺はもちろんテディの好きなことや、興味のあることなんて何も知らなかった。……ア・バオア・クーでそんなことを知る必要も無かった。あの、たった数日間。だからガトーが、友人であるガトーがその少年のペースに巻き込まれて、引っ張ってゆかれることだけを危惧した。

後ろ姿を見て後悔した。ひどくひどく後悔した。……教えてやりやあ良かった。ひっぱたいてでも。見捨てずに。……戦争屋の俺の知っていること全部。

自分の艦にも戻れない軟弱者のくせに、ウラキは凄まじいファイトを見せた……機械に対して、だ。

「貴様！ 勝手に何やってやがる……!!」

ウラキはケリイのモビルアーマーに、異様な執着を示してそれから離れなかった。必要な修理部品のリストを見せってくる。

「これだけあれば、直るんですけど……」

逃げなのだろうな、とケリイは思った。そうだこれは逃げなのだ。こいつには今行く場所がない。モビルスーツを壊してしまつて、そんなことがショックで立ち直れないような男だ。艦に戻るわけがない。だから、好きなことに逃げている。それは負け犬のすることだ。ケリイはそれを説明しようと思った。……説明しようと思つてから、自分も同じように負け犬だということに気付いた。……無理だ。説明出来っこねえ、そんなこと。

「……集めて来てやる」

「やつてみます。……直ります、多分」

好きにすりやあい。……ついに、そんな気分になつた。